

<マニュアル訂正連絡票>

FUJITSU Software

ASP システムコマンド集 V29

[J2K0-5920-01-A]

2021年6月29日発行

修正箇所(章節項): 「本書の使い方」の「G. 共通変数」

旧記事

@MAXRMSG	ワークステーションメッセージキューのメッセージ蓄積最大数を指定する。 当共通変数を変更した場合は、@SYSRMSG の変更も必要である。	整数型	32~4096 初期値: 1024	不可	次の IPL より有効となる。
----------	---	-----	----------------------	----	-----------------

新記事

@MAXRMSG	ワークステーションメッセージキューのメッセージ蓄積最大数を指定する。 当共通変数を変更した場合は、@SYSRMSG の変更も必要である。	整数型	32~4096 初期値: 1024	可	次の IPL より有効となる。
----------	---	-----	----------------------	---	-----------------

2020年9月29日発行

修正箇所(章節項): 「DSPECT (排他制御テーブルの表示: Display Exclusive Control Table)」の「注意事項」

旧記事

- OUTPUT-@DSP の場合、画面に表示できるのは 100 ページまでである。100 ページを超える場合は@LIST 指定すること。
- :
6. 獲得待ち回数が 2147483647 を越えると値が 1 にリセットされる。また、タイムアウト回数も 65535 を越えると値が 1 にリセットされる。

新記事

- OUTPUT-@DSP の場合、画面に表示できるのは 100 ページまでである。100 ページを超える場合は@LIST 指定すること。
- :
6. 獲得待ち回数が 2147483647 を越えると値が 1 にリセットされる。また、タイムアウト回数も 65535 を越えると値が 1 にリセットされる。
7. トランザクション区間で大量の更新が行われている状態など、コマンドで処理可能な排他制御テーブルの数を越えている場合は、フレームの VSIZE の値を最大にしても「S0999 フレームの作業域が不足している」で異常終了することがある。この場合、獲得資源を減らし再実行する。

2018年12月25日発行

修正箇所(章節項): STRRDAT コマンドの CAPCNV のオペランド説明

旧記事

CAPCNV (整数型) :

英小文字変換モードを指定する。

@YES :

英小文字を英大文字に変換する.

@NO :

英小文字をエラーにする.

新記事

CAPCNV (整数型) :

英小文字変換モードを指定する. **CNVK パラメタが@MODE1 の時に適用される.**

@YES :

英小文字を英大文字に変換する.

@NO :

英小文字をエラーにする.

修正箇所 (章節項) : STRRDAT コマンドの注意事項

旧記事

注意事項

- 1.本コマンドを投入すると,起動処理が完了するまでは,新たに RDA-SV の停止コマンドを投入することはできない.
- 2.通常各パラメタは,初期値のままでも運用できるが,指定する場合は仕様を確認の上,注意して指定する.
- 3.各パラメタで設定した内容は,接続するすべてのクライアントに適用される.
- 4.各ジョブの仮想記憶領域の大きさ,実記憶領域の大きさを初期値より小さくする場合は,DB アクセス処理の内容(トランザクション作業域の大きさ,更新処理で更新量など)により,領域不足が発生する可能性が大きいので,特に注意する.領域不足が発生する場合は,MAXDATA (最大データ数),TWASIZE (トランザククション作業域の大きさ)および TWFSIZE (トランザククション作業ファイルの大きさ)の値を調整し,対処する.
- 5.DSO テキスト内の格納定義が格納定義パラメタ (SCHSIZE, INT, DEV など) よりも優先する.

6.DB 格納定義テキストおよびライブラリには, @READ (読取り権) が必要である.

7.ERRCALL パラメタで指定するプログラム名には, @OPR (操作権) が必要であり, ライブラリ名には, @READ (読取り権) が必要である.

新記事

注意事項

- 1.本コマンドを投入すると,起動処理が完了するまでは,新たに RDA-SV の停止コマンドを投入することはできない.
- 2.通常各パラメタは,初期値のままでも運用できるが,指定する場合は仕様を確認の上,注意して指定する.
- 3.各パラメタで設定した内容は,接続するすべてのクライアントに適用される.
- 4.各ジョブの仮想記憶領域の大きさ,実記憶領域の大きさを初期値より小さくする場合は,DB アクセス処理の内容(トランザクション作業域の大きさ,更新処理で更新量など)により,領域不足が発生する可能性が大きいので,特に注意する.領域不足が発生する場合は,MAXDATA (最大データ数),TWASIZE (トランザクション作業域の大きさ)および TWFSIZE (トランザクション作業ファイルの大きさ)の値を調整し,対処する.
- 5.DSO テキスト内の格納定義が格納定義パラメタ (SCHSIZE, INT, DEV など) よりも優先する.
- 6.DB 格納定義テキストおよびライブラリには, @READ (読取り権) が必要である.
- 7.ERRCALL パラメタで指定するプログラム名には, @OPR (操作権) が必要であり,ライブラリ名には, @READ (読取り権) が必要である.
- 8.CNVK パラメタおよび CAPCNV パラメタで指定するコード変換モードは,認証のユーザ ID とパスワードにも影響するため,注意が必要である.

2018年6月26日発行

修正箇所(章節項):「SND CG (CG パターンの一括ダウンロード: Send CG)」の「注意事項」

旧記事

- 1.本コマンドの処理には数分必要です.
- 2.ゴシック体を印刷する場合は,文字パターンオプション(ソフトウェアオプション)を契約した ASP から SND CG コマンドを実施する必要がある.

新記事

1. 本コマンドの処理には数分必要です.
2. ゴシック体を印刷する場合は, 文字パターンオプション (ソフトウェアオプション) を契約した ASP から SND CG コマンドを実施する必要がある.
3. **ダウンロードした CG パターンを有効にするには, 一度プリンタの電源を落とし, その後電源を再投入する必要がある.**

2017年10月25日発行

修正箇所 (章節項): 「CRTBOF (バックアウトファイルの作成: Create Back Out File)」の「注意事項」

旧記事

1. バックアウトファイルの大きさは, 以下の式で表される.
(MAXTRN+TMAXTRN) * (2+ (BIBSIZE*4) + (IXBIBSZ*2+4)) (K バイト)

新記事

1. バックアウトファイルの大きさの見積り方法については, 『RDB 説明書(リレーショナルデータベース管理システム)』の「バックアウトファイル領域の見積り」を参照.

修正箇所 (章節項): 「STRWTR (ライタの起動: Start Writer)」の「注意事項」

旧記事

1. 回線系プリンタ装置に起動されたライタがスプールファイル登録待ち状態のときにNSS を終了させたい場合は, SESSION パラメタに@FILE を指定する.
2. LAN 直結プリンタ装置に対して起動するライタは仮想記憶領域 512K バイト, 実記憶領域 160K バイトが必要である.
3. 回線系プリンタ装置に対して起動されたライタが終了するまでに相手装置の電源が切断, 投入される可能性がある場合, SESSION パラメタに@FILE を指定する.

新記事

1. 回線系プリンタ装置に起動されたライタがスプールファイル登録待ち状態のときにNSS を終了させたい場合は, SESSION パラメタに@FILE を指定する.
2. LAN 直結プリンタ装置に対して起動するライタは仮想記憶領域 512K バイト, 実記憶領域 160K バイトが必要である.
3. 回線系プリンタ装置に対して起動されたライタが終了するまでに相手装置の電源が切断, 投入される可能性がある場合, SESSION パラメタに@FILE を指定する.
4. **複数 LAN 接続で, NSS 記述のリンクグループ定義において, "通信プロセッサ動作モード" に SUB を指定している状態で, SVRCHK パラメタに@YES を指定すると, サーバが切り替わっていてもメッセージが通知される.**

2017年4月26日発行

修正箇所 (章節項): CHGATJSE (自動ジョブサービス環境の変更: Change Auto Job Service Environment)

旧記事

~ (中略) ~

実行条件

キーワード	対象	権限	条件
なし	/opt/atjs	@R @X	—
なし	/opt/atjs/XATJSENV	@R @W	—
なし	/opt/atjs/XATJSFF	@R @W	—

- 本コマンドを使用するプロフィールは, @SYSCTL 権が必要である.

~ (以下、略) ~

新記事

～（中略）～

実行条件

キーワード	対象	権限	条件
なし	/opt/atjs	@R @X	—
なし	/opt/atjs/XATJSENV	@R @W	—
なし	/opt/atjs/XATJSFF	@R @W	—

● 本コマンドを使用するプロフィールは、@SYSCTL 権が必要である。

● 自動ジョブサービスを使用する場合、システム共通変数@TMSCODE に@SJIS を設定する必要がある。

～（以下、略）～

修正箇所（章節項）： DSPATJSE （自動ジョブサービス環境の表示 : Display Auto Job Service Environment）

旧記事

～（中略）～

実行条件

● 本コマンドを使用するプロフィールは、@SYSCTL 権が必要である。

～（以下、略）～

新記事

～（中略）～

実行条件

● 本コマンドを使用するプロフィールは、@SYSCTL 権が必要である。

● 自動ジョブサービスを使用する場合、システム共通変数@TMSCODE に@SJIS を設定する必要がある。

～（以下、略）～

修正箇所（章節項）： STRATJS （自動ジョブサービスの起動 : Start Auto Job Service）

旧記事

～（中略）～

実行条件

キーワード	対象	権限	条件
なし	/opt/atjs	@R @X	—
なし	/opt/atjs/XATJSENV	@R @W	—
なし	/opt/atjs/XATJSFF	@R @W	—

● 本コマンドを使用するプロフィールは、@SYSCTL 権が必要である。

～（以下、略）～

新記事

～（中略）～

実行条件

キーワード	対象	権限	条件
なし	/opt/atjs	@R @X	—
なし	/opt/atjs/XATJSENV	@R @W	—
なし	/opt/atjs/XATJSFF	@R @W	—

● 本コマンドを使用するプロフィールは、@SYSCTL 権が必要である。

● 自動ジョブサービスを使用する場合、システム共通変数@TMSCODE に@SJIS を設定する必要がある。

～（以下、略）～

2016年12月27日発行

修正箇所（章節項）： SETCDXTD（TCP/IP 配下の CORDEX の環境設定：Set CORDEX Environment）

旧記事

機能

TCP/IP インタフェースでのトランジェントタイプ CORDEX の送受信環境を設定する。

オペランド

PORT（整数型）：

相手ポート番号を指定する。初期値は 5020 である。

MN（整数型）：

連続受信回数を指定する。0 から 15 までの値が指定可能である。初期値は 0 である。

RTIME（整数型）：

無通信監視時間を指定する。0～5999 までの値が指定可能である。初期値は 0 である。

監視時間は 1 が 10 秒、999 は 9990 秒である。また、デフォルトの 0 は 30 秒である。

例

```
SETCDXTD
```

トランジェントタイプ CORDEX の送受信環境を設定する。ポート番号を 5020、連続受信回数は 0 を設定する。

終了コード

0000, 0179, 0512, 0998, 0999

参照マニュアル

『CORDEX 説明書』

関連コマンド

STRCDXT（TCP/IP 配下の CORDEX の起動：Start Cordex on Tcp/ip）

STPCDXT（TCP/IP 配下の CORDEX の停止：Stop CORDEX on TCP/IP）

RSTCDXTD（TCP/IP 配下の CORDEX の環境取消：Reset CORDEX Environment）

新記事

機能

TCP/IP インタフェースでのトランジェントタイプ CORDEX の送受信環境を設定する。

オペランド

PORT (整数型) :

相手ポート番号を指定する。初期値は 5020 である。

MN (整数型) :

連続受信回数を指定する。0 から 15 までの値が指定可能である。初期値は 0 である。

RTIME (整数型) :

無通信監視時間を指定する。0~5999 までの値が指定可能である。初期値は 0 である。

監視時間は 1 が 10 秒, 999 は 9990 秒である。また、デフォルトの 0 は 30 秒である。

注意事項

1) SETCDXTD コマンドで指定したポート番号はシステムで 1 つである。複数のジョブでポート番号が違うセンタと同時に接続する場合は、別ジョブの SETCDXTD コマンドで指定したポート番号になる可能性があるため、一つのジョブで順番に実行するか、それぞれのジョブを順番に実行する必要がある。

例

```
SETCDXTD
```

トランジェントタイプ CORDEX の送受信環境を設定する。ポート番号を 5020, 連続受信回数は 0 を設定する。

終了コード

0000, 0179, 0512, 0998, 0999

参照マニュアル

『CORDEX 説明書』

関連コマンド

SNDXFILE (CORDEX によるファイル送信 : Send CORDEX File)

RCVXFILE (CORDEX によるファイルの受信 : Receive CORDEX File)

RSTCDXTD (TCP/IP 配下の CORDEX の環境取消 : Reset CORDEX Environment)

修正箇所 (章節項) : RSTCDXTD (TCP/IP 配下の CORDEX の環境取消 : Reset CORDEX Environment)

旧記事

機能

TCP/IP インタフェースでのトランジェントタイプ CORDEX の送受信環境を取り消す。

相手ポート番号は 5020, 連続受信回数は 0 になる。

例

```
RSTCDXTD
```

トランジェントタイプ CORDEX の送受信環境を取り消す。

終了コード

0000, 0179, 0512, 0999

参照マニュアル

『CORDEX 説明書』

関連コマンド

STRCDXT (TCP/IP 配下の CORDEX の起動 : Start Cordex on Tcp/ip)

STPCDXT (TCP/IP 配下の CORDEX の停止 : Stop CORDEX on TCP/IP)

SETCDXTD (TCP/IP 配下の CORDEX の環境設定 : Set CORDEX Environment)

新記事

機能

TCP/IP インタフェースでのトランジェントタイプ CORDEX の送受信環境を取り消す。

相手ポート番号は 5020, 連続受信回数は 0 になる。

注意事項

1) SETCDXTD コマンドで指定したポート番号はシステムで 1 つである。複数のジョブでポート番号が違うセンタと同時に接続する場合は、別ジョブの SETCDXTD コマンドで指定したポート番号になる可能性があるため、一つのジョブで順番に実行するか、それぞれのジョブを順番に実行する必要がある。

例

```
RSTCDXTD
```

トランジェントタイプ CORDEX の送受信環境を取り消す。

終了コード

0000, 0179, 0512, 0999

参照マニュアル

『CORDEX 説明書』

関連コマンド

SNDXFILE (CORDEX によるファイル送信 : Send CORDEX File)

RCVXFILE (CORDEX によるファイルの受信 : Receive CORDEX File)

SETCDXTD (TCP/IP 配下の CORDEX の環境設定 : Set CORDEX Environment)

修正箇所 (章節項): SNDXFILE (CORDEX によるファイル送信 : Send CORDEX File)

旧記事

関連コマンド

EDTCDXD (CORDEX 記述の編集 : Edit CORDEX Description)

CTLCDX (CORDEX の制御 : Control CORDEX)

新記事

関連コマンド

SETCDXTD (TCP/IP 配下の CORDEX の環境設定 : Set CORDEX Environment)

RSTCDXTD (TCP/IP 配下の CORDEX の環境取消 : Reset CORDEX Environment)

EDTCDXD (CORDEX 記述の編集 : Edit CORDEX Description)

CTLCDX (CORDEX の制御 : Control CORDEX)

修正箇所 (章節項) : RCVXFILE (CORDEX によるファイルの受信 : Receive CORDEX File)

旧記事

関連コマンド

EDTCDXD (CORDEX 記述の編集 : Edit CORDEX Description)

CTLCDX (CORDEX の制御 : Control CORDEX)

新記事

関連コマンド

SETCDXTD (TCP/IP 配下の CORDEX の環境設定 : Set CORDEX Environment)

RSTCDXTD (TCP/IP 配下の CORDEX の環境取消 : Reset CORDEX Environment)

EDTCDXD (CORDEX 記述の編集 : Edit CORDEX Description)

CTLCDX (CORDEX の制御 : Control CORDEX)

2016年6月28日発行

修正箇所 (章節項) : STRRPULG

旧記事

注意事項

1. 本コマンド実行時は、レプリケーションサービスが開始状態でなければならない。
2. 対象のレプリケーショングループは同期方式が差分方式でなければならない。
3. 対象のレプリケーショングループの更新情報取得状態によらず、取得開始処理を実行する。
4. 対象のレプリケーショングループが同期実行中に本コマンドを実行してはならない。
5. 対象のレプリケーショングループに属するファイルをアクセス中に本コマンドを実行してはならない。誤って実行した場合、更新情報が正しく取得されない状態となる。
6. エラー時に詳細エラーがシステムログに出力されることがある。その場合は、システムログを参照しエラー内容を確認する。
7. 本コマンド実行時に対象レプリケーショングループの更新情報ファイルが初期化される。

新記事

注意事項

1. 本コマンド実行時は、レプリケーションサービスが開始状態でなければならない。
2. 対象のレプリケーショングループは同期方式が差分方式でなければならない。
3. 対象のレプリケーショングループの更新情報取得状態によらず、取得開始処理を実行する。
4. 対象のレプリケーショングループが同期実行中に本コマンドを実行してはならない。
5. 対象のレプリケーショングループに属するファイルをアクセス中 (**INPUT-OPEN 除く**) に本コマンドを実行してはならない。誤って実行した場合、更新情報が正しく取得されない状態となる。
6. エラー時に詳細エラーがシステムログに出力されることがある。その場合は、システムログを参照しエラー内容を確認する。
7. 本コマンド実行時に対象レプリケーショングループの更新情報ファイルが初期化される。

2016年4月28日発行

修正箇所 (章節項) : STRNSS

旧記事

注意事項

1. VS サイズは、作成した NSS 記述の定義数によって変更する必要がある。詳細は『[ネットワーク機能解説書](#)』の「コマンドの使用資源」を参照。

新記事

注意事項

1. VS サイズは、作成した NSS 記述の定義数によって変更する必要がある。詳細は『[ネットワーク機能解説書](#)』の「コマンドの使用資源」を参照。
2. NSS を起動するには TLIBEX 環境が必要である。
TLIBBS 環境を使用されている場合は、TLIBEX 環境へ移行する。TLIBEX 環境への移行に関する詳細は、『[システム移行手引書](#)』の「バージョンアップ移行」を参照されたい。
また、システム共通変数の多階層ルートライブラリの設定を@TLIBEX にする。

2016年2月26日発行

修正箇所（章節項）： 1.1 ジョブの実行「SBMJOB」の「注意事項」

旧記事

新記事追加

新記事

5. 実行プロフィールを付与した制御言語プログラムで SBJOB コマンドを実行した場合、起動元ジョブの実行プロフィールが起動先ジョブにも設定される。

2015年8月31日発行

修正箇所（章節項）： RSTCMV

旧記事

注意事項

1. 復元ボリュームの状態を知るには、保管ボリュームの表示（DSPR ETN）コマンドを使用する。
2. CHGCMVAR コマンドで変更できないシステム共通変数、および@SVRINTM の値は変更されない。
3. IPL 後に有効となるシステム変数の初期設定は IPL 時に行われるため、RSTCMV コマンド実行後に IPL が必要である。

新記事

注意事項

1. 復元ボリュームの状態を知るには、保管ボリュームの表示（DSPRETN）コマンドを使用する。
2. CHGCMVAR コマンドで変更できないシステム共通変数、および@SVRINTM の値は変更されない。
3. IPL 後に有効となるシステム変数の初期設定は IPL 時に行われるため、RSTCMV コマンド実行後に IPL が必要である。
4. @MAXRMSG は、@SYSRMSG の現在値を超える値を復元できない。この場合は RSTCMV コマンドを 2 度実行し、@SYSRMSG の値を先に復元してから@MAXRMSG の値を復元する。

修正箇所（章節項）： 「CANALJOB」の「実行条件」

旧記事

新記事追加

新記事

- ・デマンドジョブまたはバックグラウンドジョブで実行できる。

修正箇所（章節項）：「CANALJOB」の「注意事項」

旧記事

新記事追加

新記事

6. キュードジョブから実行した場合は、本コマンドは終了せず、その結果、全ジョブが打ち切られず、本体の電源も切断されない。

以上